

第3回教育哲学会奨励賞 選考結果および授賞理由

選考結果

第3回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第112号、113号に掲載された論文を対象として理事会において選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、福若真人会員の「「聞くこと」の他動性と「行うこと」の先行性—レヴィナス思想における非暴力的な「教え」の可能性と条件—」（『教育哲学研究』第113号所収）を受賞作として選定した。

授賞理由

福若論文は、「外部から到来し、私が抱えもっている以上のものを私にもたらす」ような「教え」が、なぜ・いかにして非暴力的な働きでありうるかを、レヴィナスの論理に即して解明した論文である。主体に内在する暴力性を徹底して考察したレヴィナスが、「教え」という働きについては、主著『全体性と無限』でその非暴力性を強調している。福若論文は、「教え」において学び手が作用をこうむるという事態をレヴィナスに即して精緻に分析し、そのことを通して「教え」の非暴力性についてのレヴィナスの主張を理解できるものになっている。福若論文が着目するのは、学び手が「師」に注意を喚起されその発話を聞くという場面である。ここでは、語ること／聞くことは、能動／受動でも、また主語が発話の帰結に巻き込まれる「中動」でもなく、他者の言葉が私を動かす「他動性」の特徴を示している。これによって、学び手が暴力的でない仕方で動かされるという事態が可能になる。また、そうした可能性を支えているのは、学び手が「師」の現前に身を置くこと、つまり「聞くこと」にさらに先立つ「行うこと」なのである。

教育に付随する暴力性は、外部から到来して学び手の変容を引き起こすような「師」の作用において著しいように思える。他方、レヴィナスは人間関係の暴力性に並外れて敏感な思想家であった。そのレヴィナスに、教育的作用が非暴力的に他者の変容を引き起こす可能性への洞察を見出そうとした福若論文の試みは興味深い。もっとも、レヴィナスの言う「師」やその「教え」が、日常的な意味での教育の場面にどの程度適用可能かは議論の余地がある。また、教育哲学領域で蓄積されてきたレヴィナス思想に関わる先行研究との、より明示的な取り組みが求められるだろう。しかし、＜教育の持つ暴力性をいかに克服するか＞＜暴力性を免れるような教育はありうるのか＞という、素朴であるとともに根源的な教育哲学的な問いを、現代の先端的な哲学思想との対話のなかで探究したその姿勢は高く評価できるものであり、今後の教育哲学研究の一つの指針となることが期待できる。

以上から、理事会では福若真人会員の論文「「聞くこと」の他動性と「行うこと」の先行性—レヴィナス思想における非暴力的な「教え」の可能性と条件—」を第3回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。